ロシア汎スラヴ主義とルシン人の民族性を巡る問題

大矢　温

はじめに

対ナポレオン戦争以降にヨーロッパ各地で民族独立運動が高揚する中で、ポーランド人も3度にわたる分割によって喪失した祖国を再建し、民族的な独立を獲得しようと、シュラフタ層を中心に民族独立運動を展開していた。他方、ポーランド分割によってオーストリア帝国に併合された旧ポーランド領ガリツィアに住むルシン人は、帝国内において民族文化を否定され、ポーランド人地主のもとで農民として抑圧されていた。ルシン人の解放運動は、このような複雑な状況なもとで、直接的にはポーランド人地主に敵対することとなり、それはポーランド人の解放運動と衝突することとなった。

他方、ロシアにおいて1861年2月に農奴解放令が公布されると、国内の大規模な改革がいよいよ端緒についたことが誰の目にも明らかになった。ロシアは大きな変革の時を迎えたのだった。しかし解放されたはずの農民は、政府による解放令の内容に不満を募らせ各地で反乱を繰り返した。また、旧ポーランド地域においてもこれと軌を一にしてロシアの支配に対する抗議運動が激化し61年10月には戒厳令が施行される事態へと発展していた。このような状況の中で革命派はロシアにおける革命との連携という視点からポーランドにおける解放運動を注目していたし、汎スラヴ派はカトリック地主からの正教徒（実際は合同派）ルシン人の解放という視点で両者の対立を見ていた。

本稿で対象にするのは、ルシン人の民族解放運動をめぐるロシア文壇における論争である。1861年という節目と前後したルシン人に関わる論争を素材として、イヴァン・アクサーコフを中心にスラヴ主義グループの中から汎スラヴ主義思想が展開する過程を分析してみたい。

Ⅰ　東ガリツィアのルシン人

ガリツィアの歴史は複雑である。12 世紀には現在のウクライナ西部にガリツィア（ガーリチ、ハーリチ）公国が設立されていた。それまでもこの地方をリューリック系の公が支配しており、1097 年のリューベチ諸公会議について伝える『原初年代記』にもガリツィア公についての記述があるので[1]、歴史的にキエフ・ルーシに含まれていた、という意味から、ガリツィアのルシン人が「ルーシ人 русский[2]」と自称するには根拠があるわけである。

やがてキエフ・ルーシの衰退によってガリツィアは 14 世紀中葉にはポーランド王国の支配下に入る。支配民族のポーランド人は地主層を形成し、ルシン人は農民としてこれに隷属した。19 世紀中葉の統計でも「ルシン人にはシュラフタはいない」と結論されているように[3]、民族の差が階級の差として固定されたわけである。ただしその際、血統的にはルシン人でも蓄財によって地主となり、地主としてカトリックに改宗し、ポーランド文化を受容したものも「ポーランド人」として分類されている可能性も排除できないが、いずれにしろ、1772 年のポーランド分割にいたるまで支配層のポーランド人（ポーランド化したルシン人を含め）によってガリツィア社会上層部の文化的ポーランド化が進んだのだった。

また、「ルーシ人」を自称するルシン人信者を抱える正教会も、ポーランド支配下にあって、ロシア正教会から離れ、合同派（ウニアート、またはギリシア・カトリック）と呼ばれる、ローマカトリックに従属する教会組織に属するようになる。

そもそもこの合同派教会の創設は、1569 年のリュブリン合同によってポーランドと連合王国を形成したリトアニアにとって必要だったようだ。周知のごとく、キエフ・ルーシに代わって台頭したモスクワ大公国は、1453 年にヴィザン

1 栗生沢猛夫『ロシア原初年代記を読む』、成文社、2015 年、182 頁。
2 Русский は Русь の形容詞形であるが、「ロシアの」と訳す場合もある。本稿では適宜、「ルーシの」または「ロシアの」と訳し分ける。ここでは、「キエフ・ルーシの民」という意味で使われているので「ルーシ人」とした。
3 *Пашаева М. Н.* Очерки истории русского движения в Галицине XIX-XX вв. М., 2001. С. 10.

チン帝国が滅亡するとその後継者を自称し、キエフ府主教座をモスクワに移し、またさらに 1558 年には独立正教会位を宣言するに至った。他方、すでにキエフを含む現在のウクライナ西部に広がる広大な地域に拡大していたポーランドと連合したリトアニアは、領域内の東方正教徒のルーシ系の住民（ルシン人を含む）をロシア正教会から切り離す必要性に迫られた。このような事情によって、リュブリン合同と並行して教会内部でも教会合同が推進され、1596 年にブレストにおいてそれまで東方正教会に属していた司教座がカトリックのもとに編入されたのだった。ただしこの際、東方教会典礼の不可侵が謳われたこともあって、典礼も、そこで使われる教会スラヴ語にも変化はなかった[4]。少なくとも一般信者のレベルでは、合同派はカトリックではなく伝統的な正教会の教会であると目に映ったはずである。

さて、18 世紀末の 3 度の分割を経てポーランドが消滅すると、ルシン人が多く住む東ガリツィアは、ポーランド人が多数を占める西ガリツィアとともに、オーストリア帝国内に新たに作られた「ガリツィア・ロドメリア王国」の一部となった[5]。ただしポーランドが消滅したにもかかわらず、賦役は廃止されずポーランド人地主の特権は保持された。敵対する二つの民族が同じ行政区分に包括されたのは、帝国内の諸民族を互いに対立させることによって統治しようとするオーストリア帝国政府の民族政策を反映したものと思われる[6]。典礼において正教会の伝統を保持し、日常会話においては小ルーシ語系の言葉を話すルシン人農民は、ポーランド語を話すカトリック教徒で地主階級のポーランド人と民族的、階級的に敵対するわけである。このようにポーランド分割以後にオーストリア帝国の一部となったガリツィアにおいて、ドイツ人の皇帝を頂くオーストリア帝国の支配下にポーランド人シュラフタがおり、さらにポーランド人

4 早坂真理『ベラルーシ』、彩流社、2013 年、244-245 頁参照。

5 *Пашаева.* Там же.

6 この間の事情をアクサーコフは次のように解説している。「いくつかの民族性（クロアチア人とスロヴァキア人に対するハンガリー人、ガリツィアのルーシ人に対するポーランド人）の私利私欲がオーストリアの支配の存在を堅固にし、ウィーンはそれら相互間の反目を巧みに利用しているのだ。」その上で彼は、ポーランド人とルシン人との反目の原因はポーランド側にある、としている。*Аксаков И. С.?* Сноски к статье «Протест Галицких русинов» // Русская беседа. 1869 г. №. 6. Смесь. С. 81-82.

地主によってルシン人農民が支配される、という重層的な支配構造が形成されたのである。

ポーランド化が進む中でルシン人の文化は衰退の一途をたどった。1830 年代にオーストリア帝国内の諸民族の間で民族復興運動が進行する中でも当初、ルシン人の民族運動は低迷していた。皮肉なことに 1830–31 年のポーランド人の反乱がルシン人の民族運動の刺激になったとも言われるが[7]、いずれにしろ、ヨーロッパ全土が民族主義で沸き返る中でルシン人だけが沈黙していたとは考え難い。その際、ルシン人の中の唯一の知識階級は聖職者だったので、彼らの民族運動は、合同派聖職者を中心に展開することになった。

ルシン人の民族性の復興運動は、オーストリア帝国内の他の諸民族の場合と同様、まずは言語、文芸復興運動としてはじめられた。とはいえ、当初はルシン人の言語、つまり「ルシン語 русский язык[8]」とは何か、ということすら明確でなかった。ルシン人が日常使用する口語が「ルシン語」には違いなかったのだが、これを独立した言語とみるか、小ルーシ語の一方言とみるか意見が分かれたし、文語体にしても、ルシン語の口語体を整備して新たに文語体を創出するのか、あるいは教会スラヴ語やロシア語文語体をルシン語文語体として採用するかについても意見の一致はなかった。

このように停滞したルシン人の民族復興運動に新しい地平を開いたのは、「諸民族の春」とも呼ばれる 1848–49 年の革命的動乱だった。フランスの二月革命を嚆矢とした動乱はオーストリア帝国にも波及し、ウィーンでは立憲主義者による三月革命によって宰相メッテルニヒは亡命に追い込まれた。同時に帝国内の各地でも民族の分離独立運動が高揚した。オーストリア帝国内のみならず、ヨーロッパ全土で自由主義、民族主義運動が高揚する中で、他の諸民族にくらべて遅れた出足ではあったが[9]、ルシン人も「ゴロヴナヤ・ルスカヤ・ラー

7 *Пашаева.* С. 16.

8 「Русский язык」は通常「ロシア語」と訳されるが、ここでは「Русский」を自称するルシン人の言葉なので「ルシン語」とした。

9 オーストリア帝国内では 1826 年にペスト（ブダペストに合併されるのは 1873 年）でセルビア人が民族意識高揚のための組織マーチツァ Матица を設立した。これに続いてチェコ人は 1830 年にプラハでチェコ・マーチツァ、クロアチア人もザグレブで 1842

ダ Головная руская рада」という民族主義組織を立ち上げた。主要なメンバーは聖職者であり、議長に選出されたのは司教の[10]グリゴリー・ヤヒーモヴィッチ、機関誌は初のルシン語新聞『ゾーリャ・ガリツカヤ』だった[11]。帝国内の他の民族運動に倣い、「ラーダ」のもとに民族文化の啓蒙組織「ガリツィコ・ルーシ・マーチツァ」も設立された。1849 年の新学期からはリヴォフ大学に「ルシン語」の講座が開かれ、ヤコヴ・ゴロヴァツキーが教授に招かれた。ここで教科書として使われたのは、同年に彼が出版した『ルシン語文法』であった[12]。革命によって動揺したオーストリア帝国政府の譲歩策の一環として、支配言語のドイツ語、ポーランドに加えて、ルシン人の言語が民族言語として認められたのであった。とはいえ、ロシアとの接近を警戒するオーストリア政府によって「世俗文字 гражданка[13]」が禁止されていたため、文字は教会スラヴ文字が使われ、文法はロシア語文法にならって整備された[14]。

ただし、ここでいう「ルシン語」というのは、ルーシの伝統を継承する一方言、あるいは一言語とみなされてはいたものの、この時点では非常にあいまいな概念であった。「ラーダ」、および「マーチツァ」内でも議論が分かれたが、結局、当時のルシン人の口語をもとに世俗文字と教会スラヴ文字を使って表記する「イジーチェ язычие」と呼ばれる文体が考案された。スラヴ系諸民族の共通の言語としてはロシア語文語が想定されていた。

Ⅱ　スラヴ思想と汎スラヴ主義への展開

1836 年の雑誌『テレスコープ』に発表されたチャダーエフの「哲学書簡」は、

年にマーチツァを立ち上げていた。См. “Матица” // Энциклопедический словарь Ф. А. Брокгаус и И. А. Ефрона. С-Пб., 1890-1907.

10 合同派なのでローマ教皇のピウス 9 世によって叙任された。

11 *Пашаева*. С. 33-34.

12 *Головацкий Я. Ф.* Грамматика Руского языка. Львов, 1849.

13 正しくは「Гражданский шрифт」。ピョートル一世によるロシア語アルファベット改革によって 1708 年に世俗文章記述のために整備された書体。近代以降に作られた世俗文字で記述することは、歴史的にキエフ・ルーシ語を発展させたルーシ語ではなく、現代ロシア文字で記述することを意味する。

14 *Пашаева.* Там же. С. 38-39.

西欧との対比においてロシアの特殊性が意識され、おもにロシアの後進性という観点から展開された、いわゆる「西欧派とスラヴ派の論争」の出発点になった事件であった。モスクワのサロンを中心としたこの論争についてはП. В. アンネンコフ[15]やA. И. ゲルツェン[16]などが生き生きとした描写を残しているし、この論争は日本においても「スラヴ派と西欧派の大論争」として紹介されている[17]、19世紀ロシア思想史上の重要なテーマである。

ただし厳密を期すなら、実際にモスクワのサロンで A. C. ホミャコーフの周辺に「スラヴ派」と呼ばれるグループが形成されるのは、これより少し後、39年末のことであった[18]。また、それに先立つ 1820年代にはすでにП. キレーエフスキーがフォークロアの側面からロシアの民族性に注目していたし、「官制国民性」の唱道者として知られる M. П. パゴーヂンも歴史学の側面からルーシの起源やその特殊性を研究していた。また彼は同時に、ロシア国内でルシン人の問題に早い時期から着目していた一人でもある。

パゴーヂンとルシン人との関係において重要な意味を持つのは、彼の 1835年の外遊である。1835年の7月末に海路ペテルブルクを発ったパゴーヂンは、ローマン主義の薫り高いベルリン大学でリッテル[19]の歴史地理学やランケ[20]の歴史学、ステッフェンス[21]の哲学の講義などを聴講したのち、ライプチッヒ、ドレスデンを経由してプラハに到着した[22]。プラハではチェコの民族運動家の B. ハンカと交流し、民族運動家でスラヴ学者の P. Й. シャファリクの知己を得、困難な状況における彼の仕事ぶりに感銘を受けてたのだった[23]。

この旅行でドイツのローマン主義やチェコの民族運動に感化されて、パゴー

15 *Анненков П. В.* Замечательное десятилетие 1838-1848 // Литературные воспоминания. М., 1960.
16 *Герцен А. И.* Былое и думы. Глава XXIX // Собрание сочинений в 30 томах. М., 1956. Т. 9.
17 勝田吉太郎『近代ロシヤ政治思想史』、創文社、昭和36年。
18 大矢温「古典的スラヴ派の言論活動」、『文化と言語』、2014年第80号、参照。
19 Karl Ritter (1779-1859).
20 Leopold von Ranke (1795-1886).
21 Henrich Steffens (1773-1845).
22 *Барсуков Н.* Жизнь и труды М. П. Погодина. С-Пб., 1891. Т. 4. С. 312-313.
23 Там же. С. 314.

ヂンが「スラヴの地」、あるいは「スラヴの民族性」といった概念に関心を深めたことは疑いもないし、その後の彼の思想に対しても、スラヴ人の歴史や民族性における言語の重要性などを説くシャファリクが影響を与えたことも十分想像できる。また、パゴーヂンはこのプラハ滞在中にシャファリクからパラツキーらのチェコ民族活動家を紹介されているので、このシャファリクとの交流はその後のパゴーヂンの汎スラヴ思想に大きな影響を与えたはずではあるが、本稿のテーマから外れるので、ここではこれ以上深入りしない。

ガリツィアのルシン人に関しては、パゴーヂンはこの旅行の帰途、ガリツィアの中心都市リヴォフに立ち寄っている。そこでП. キレーエフスキーらのロシア人の一行と出会い、ともにキエフ・ルーシ時代の正教関係の遺跡を見学したり、13 世紀の古文書を入手したりしている[24]。ガリツィアには「ルーシの歴史にとって興味深く、重要な多くのものがある」とパゴーヂン自身が述べているように[25]、ガリツィアのルシン人の歴史はパゴーヂンの中でキエフ・ルーシの歴史、古代から現在に至るロシア史の一部として認識されたのである。ここで彼は、キエフ・ルーシを介した歴史の中に、ロシア国外のスラヴ系民族との絆を発見したのであった。これをもって汎スラヴ主義思想の萌芽ということができるかもしれない。

とはいえ萌芽はあくまでも萌芽であって、40 年代のモスクワのサロンを中心として展開したスラヴ派と西欧派の論戦の中でガリツィアのルシン人の問題はほとんど関心を呼ばなかった。古代史の一部としては認識されてはいたものの[26]、同時代のルシン人をロシア人を長とするスラヴ系諸民族の兄弟的連帯、つまり汎スラヴ主義的な文脈でとらえることはなかった。そもそもスラヴ派のグループが国外のスラヴ系諸民族に目を向け、スラヴの問題を政治問題に結びつけるようになったのは、主にクリミア戦争後のことであった[27]。

---

24 Там же. С. 328.
25 Там же. С. 329.
26 Например, см. О древней русской истории // Москвитянин. 1845. №3 (5-7). С. 19.
27 大矢温「クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフ：スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開」、『文化と言語』、2008 年第 69 号参照。

すでに別稿で指摘したように[28]、クリミア戦争はスラヴの問題がロシアの国内問題から国外のスラヴ系諸民族をも含む国際問題へと転換したという点で、一つの画期であった。この転換の外的な要因として、敗戦によって失われた国際的地位を回復するために大規模な改革が望まれたこと、改革に向けた議論を容認するために検閲が緩和されたこと、などを挙げることができる。戦時中にトルコ領内のスラヴ系諸民族がロシアに対して共感を表明したこともその要因として指摘できよう。

検閲の緩和によって、スラヴ派のグループは 1856 年 2 月に新雑誌『ロシアの談話』の出版許可を取り付けることに成功する[29]。発行者兼編集者になったのは A. И. コシェリョーフ、彼のほかにも A. C. ホミャコーフ、Ю. Ф. サマーリン、B. A. チェルカッスキー公といった古典的スラヴ派のメンバーがこの雑誌の出資者に名を連ねた[30]。1856 年 4 月に発行された創刊号には、出版許可に奔走したホミャコーフの巻頭言に続いて、文学やフォークロアを重視するスラヴ派の伝統であろう、ホミャコーフ、И. アクサーコフらの詩、そして П. キレーエフスキーの採集した民謡が掲載されている。また、西欧派との論争を意図して、「学問」欄にはサマーリンの「学問における民族性について」、「批評」欄にはチチェーリンの共同体論を批判する И. Д. ベリャーエフとコシェリョーフの書評が掲載されている。このように『ロシアの談話』は、スラヴの民族性の宣伝、およびそれを否定する西欧派との論争を意図して刊行された雑誌であった。

特にこの時期、一連の改革が焦眉の問題となるなかで、スラヴの特殊性の議論における中心的なテーマであった共同体の問題は、農奴制改革と結びついて活発な議論の対象となった。1857 年 4 月にはコンスタンチン・アクサーコフが中心となって、週刊新聞『世評』が創刊された。これは雑誌『現代人』、『祖国雑記』を拠点とする西欧派と論争をするためには、より頻度の高い刊行物が必

28 同上、177 頁。
29 これ以前にもスラヴ派のグループは『モスクワ文集』を発行したが、短命に終わっている。大矢温「古典的スラヴ派の…」、52 頁、参照。
30 *Кошелев А. И.* Записки / Сост. Цимбаева Н. И. МГУ, 1991. С. 95.

要だったためである。またこのほか、1858 年 3 月には農奴制改革について議論するために『ロシアの談話』の別冊、という形で月刊誌『農村の整備』が創刊されている。

さて、スラヴの問題の重点が国外スラヴ系民族の問題へと転換した、という意味では『ロシアの談話』創刊号の「雑報」欄に掲載された A. Ф. ギリフェルヂンクのコシェリョーフ宛の 2 通の手紙が重要である。1 通目はサクソニアにおけるスラヴ系民族、セルボ・ラウジッツ人の民族文化復興運動についての報告である。ギリフェルヂンクはここで、1820 年代のライプチヒ大学で発生した民族運動がパラツキーやハンカの影響で民族文化復興の自覚的な運動となり、さらにそれが 1847 年にはマーチツァの設立に至った過程をコーシェレフに伝えている[31]。

コシェリョーフに宛てられたギリフェルヂンクのもう一通の手紙は、多少複雑な経緯を経て『ロシアの談話』誌上に現れた。これは、リヴォフ大学の Я. Ф. ゴロヴァツキーがチェコのハンカに宛てて送ったルシン語の出版活動の現状についての報告「1855 年のガリツィアにおけるルシン人の活動」を、ハンカがギリフェルヂンクに転送し、さらにそれをギリフェルヂンクがコシェリョーフに再転送したものである。馴染みのない「ルシン語」（つまりイジーチェ）で記述されたゴロヴァツキーの報告を送るにあたってハンカは、ギリフェルヂンクに対して、「当地ではルシン人たちは自分たちの言語にまだ慣れていない」[32]と注釈をつけてゴロヴァツキーの報告を転送している。実際この報告では、固有名詞を中心に教会スラヴ文字が使われているほか、一部、ロシア語にない単語も使われているが、それらの単語には注釈がついているのでルシン語で書かれているにもかかわらず、それが理解の妨げにはなっていない。むしろルシン語とロシア語との近似性を強く印象付けるものとなっている。

ここでゴロヴァツキーは 1855 年に出版されたルシン語書籍を列挙している

31 *Гильфердинг А. Ф.* Народное возрождение сербов-лужичан в Саксонии // Русская беседа. 1856. Кн. 1. С. 4-15.

32 *Он же.* О русской литературной деятельности в Галиции в 1855 году // Там же. С. 38.

のだが、文芸復興運動は必ずしも順調には進んでいなかった模様だ。上述のルシン語新聞『ゾーリャ・ガリツカヤ』が「公衆の無関心の故に」[33]廃刊されるなど、彼にとって 1855 年は「文学活動における全くの停滞」であった[34]。

このように『ロシアの談話』は、その創刊号から国外のスラヴ民族に関心を寄せていた。その際、ハンカやパラツキーらのチェコ人に先導される形で高揚したオーストリア帝国内の民族運動とロシアのスラヴ派グループを結び付けたのがギリフェルヂンクだった。少し後の 1858 年にスラヴ人を援助することを目的にスラヴ慈善協会（スラヴ委員会）が設立された時にも彼はその中心メンバーとして活動しているので、彼はスラヴ派が汎スラヴ主義に転換するにあたって、重要な役割を演じていたことになる。

さて、ギリフェルヂンクと並んで汎スラヴ主義への転換に大きな役割を演じたのがイヴァン・アクサーコフである。おそらくは兄のコンスタンチンの影響であろう、40 年代から古典派スラヴ派のグループに属していたイヴァンは、1851 年にコシェリョーフに誘われてジャーナリストとしての活動を開始する。文集『モスクワ文集』の編集を任されたのであった。これはかつて 46 年と 47 年に 2 回だけ出版されただけで、さして世間からの反響を呼ばぬままに休刊していたスラヴ派の出版物である[35]。1852 年に新たに出版された『モスクワ文集』第 1 巻には、イヴァン・キレーエフスキーの「ヨーロッパ啓蒙の性格とそのロシア啓蒙との関係について」、コンスタンチン・アクサーコフの「スラヴ人一般、特にロシア人の古代の習慣について」といったロシアの特殊性に関わる論文、ピョートル・キレーエフスキーが収集したロシア民謡、ホミャコーフやイヴァン・アクサーコフの詩、そしてコシェリョーフのロンドン万博見聞記などが掲載された[36]。スラヴ派としては久しぶりにグループの結束を世に示した『文集』であり、さらに年内に全４巻を出版する予定であったのだが、イヴァン・

33 Там же.
34 Там же. С. 40.
35 サマーリンは「そこに書かれた言葉は社会にいかなる影響も与えなかった」と総括している。*Самарин Ю. Ф.* Письмо от 9 февраля 1856 г. // Сочинение. М., 1911. Т. 12. С. 426.
36 Оглавление // Московский сборник. М., 1852. Т. 1.

キレーエフスキーの論文が問題視されたため[37]、検閲によって残りの 3 巻は出版できなかった。いささかあっけない幕切れであった。それだけではない。『モスクワ文集』の発禁処分に付随してスラヴ派の主要なメンバーが事実上の執筆禁止処分に処せられてしまったのだ。スラヴ派のグループは上述の『ロシアの談話』が発行される 1856 年まで発言の機会を奪われていたのであった。

すでに述べたように、クリミア戦争の敗戦という外的条件の変化によって『ロシアの談話』は日の目を見たのだが、それと同時に、ギリフェルヂンクの手紙など『ロシアの談話』の内容からは、従来おもにロシア国内の問題に関心を持っていたスラヴ派のグループが国外のスラヴ民族に目を転じたことが見て取れる。実際、58 年からコシェリョーフから編集を任され、実質的な編集者として誌面作りを担当するようになったイヴァン・アクサーコフは「評論」欄を強化し、ロシア国外のスラヴ人についての情報掲載に力を注いだ。ガリツィアに関しても、1859 年 5 月にローマ字表記を導入するために委員会がオーストリア内務省によって組織され、これにルシン人が抵抗してキリル文字表記を守ったことを伝える「委員の一人から」のニュースを掲載している[38]。

さらにアクサーコフは『ロシアの言葉』のみならず、これと並行して自らの新聞『帆』をも創刊する。ここで彼は単にロシアの特殊性を強調するのみならず、国外のスラヴ系諸民族との連携を一層強く訴えるのだった。

『帆』についてアクサーコフは、1858 年の『ロシアの談話』第 4 号の巻末に「1859 年の新聞『帆』の出版について」という一文を掲載し、新聞の性格を宣言している。アクサーコフによれば『帆』の旗印は「ロシアの民族性」である。「我々はあえて我らの旗印を掲げる」、「我らの旗印とは、**ロシアの民族性**（隔字体）」である、と。アクサーコフにとって『帆』は『ロシアの談話』と同じスラヴ派の刊行物であった。「『帆』は全く別で自立した出版物でありながら『ロシアの談話』と同じ方向性に属している」[39]。このように『帆』はロシアの独

37 «Киреевский, Иван Васильевич». СИЭ. М., 1965. Т. 7. С. 278.
38 Протест галицких русинов против австрийского министерства // Русская беседа 1859. № 6. С. 81-92.
39 *Аксаков И. С.* Об издании в 1859 году газеты “Парус” //Литературная критика /Аксаков

自性を掲げる点で従来のスラヴ派の伝統を継承するものであったが、それと同時にロシア国外のスラヴ民族との連携をも強く意識したものだった。彼はここで「スラヴ人種の民族性」[40]を認め、「スラヴの精神的な統一の名において、我々ロシア人は、兄弟の手をすべてのスラヴの民族性に伸ばす」[41]とロシア人を中心としたスラヴ系諸民族の連帯を謳うのだった。

ところがアクサーコフの『帆』は、彼がその旗印に掲げた「民族性」が危険視されたため、2 号をもって発行が禁じられてしまった。すでにアクサーコフを実質的な編集者としていた『ロシアの談話』の方も、コシェリョーフがアクサーコフを正式な編集者として許可申請したが認められず、60 年の第 2 号をもって廃刊になってしまった。またしてもアクサーコフは発言の機会を奪われてしまったのである。『ロシアの談話』廃刊の辞でアクサーコフは、「諸般の事情によって」廃刊せざるを得なくなったことに対する無念さをあらわにしながらも[42]、スラヴ民族の問題について世論の関心を惹起した功績を誇る。「我々はスラヴの問題を考古学的興味の分野から生き生きとした、現実的な共感の分野に引き上げ、我が国の文学におけるスラヴ仲間のサークルにおいて知的な活動を復活させることに成功した」[43]と。

アクサーコフが再び言論活動に復活するのは、ロシア国内で農奴解放令が発布された後の 1861 年 10 月のことであった。新しい週刊新聞は『日』と名付けられた。沈黙を余儀なくされていたアクサーコフにとって、待望の機関紙であった。厳しい検閲のもとで「政治欄なしで」という条件付きで許可された新聞ではあったが、アクサーコフは積極的にスラヴもの問題を取り扱う意気込みだった。農奴解放令発布という「ロシア史の新たな紀元」において[44]、ロシアに敵対的な世論に反論する機会を得たのだ。「ついに我々は挑戦状を受け取り、

К. С., Аксаков И. С. М., 1981. С. 254.

40 Там же. С. 255.

41 Там же.

42 *Аксаков И. С.* Заключительное слово «Русской беседы» // Отчего так нелегко живется в России? / Греков В. Н. сост., М., 2002. С. 109.

43 Там же. С. 110.

44 *Он же.* Москва 14-го октября // День. М., 15 октября 1861. № 1. С. 1.

自らのため、我らスラヴの兄弟たちのために、果敢に評論のヨーロッパとの戦いに立ち上がる時が来た！」[45]。アクサーコフにとって西欧に対抗して、クリミア戦争によって失われたロシアの国際的プレステージを回復するためには、国内の改革、および国外のスラヴ系諸民族の結束が不可欠であった。かれにおいて国際問題は国内問題と連動しているのであった。「ロシアが本当のロシアになるとき、スラヴの問題はおのずから解決される」[46]。敗戦から立ち直ったロシアは、スラヴ唯一の大国として、「**物質的精神的抑圧からスラヴ諸民族を解放し**（隔字体）」「力強いロシアの鷹の翼の庇護下に、自立した精神的、あえて言えば**政治的生活**の贈り物をする歴史的使命、道徳的権利がある」[47]。このように主張することによって、農奴解放令直後のロシア社会において、アクサーコフはその汎スラヴ主義思想を展開するのだった。

Ⅲ　『言葉』を巡る論争

すでに述べたように、東ガリツィアでは民族組織マーチツァを中心にルシン人の文芸復興運動が展開していた。民族意識が高揚し、ルシン語を復興させる過程で『ゾーリャ・ガリツカヤ』に続く新たなルシン語の新聞を発行するアイデアが出たのも自然なことだった。ルシン語の新聞は『スローヴォ』と名付けられ、1861 年 1 月にリヴォフで創刊された。『スローヴォ』はその巻頭に「我々の綱領」と題する新聞の綱領を掲げる。ここで『スローヴォ』は、「我々はルシン人として存在する。そしてルシン人として自らの独自の起源、習慣、言語と信仰を持つ」[48]と高らかにルシン人としての民族性を謳いあげている。

他方、ロシア国内でこの『スローヴォ』を最初に批評したのは『現代人』の H. Г. チェルヌィシェフスキーだった。彼は 1861 年第 7 号の『現代人』に『スローヴォ』の創刊号、および第 2 号を批判の俎上に挙げた論評「民族的戦術不

45 *Он же.* Славянский отдел // Там же. С.15.
46 *Он же.* Письмо М. Ф. Раевскому от 15 июля 1861 г. // И. С. Аксаков в его письмах. С-Пб., 1986. Т. 4. С. 60.
47 *Он же.* Славянский отдел // Там же. С. 15.
48 Цитата по Чернышевскому. *Чернышевский Н. Г.* Национальная бестактность // Полное собрание сочинений. М., 1950. Т. 7. С. 776.

在 Национальная бестактность」を発表した。この論評においてチェルヌィシェフスキーは、1. 小ルーシ民族の一部であるルシン人が独自の言語を作り出そうとしている点、2. 言語のみならず『スローヴォ』がルシン人の民族意識をあおってポーランド人と対立している点、そして 3. このようなルシン人民族運動が聖職者によって担われている点、を厳しく批判した[49]。

『スローヴォ』の一部を抜粋しながら、チェルヌィシェフスキーはまず、この新聞が小ルーシ語で書かれていないことを問題にする。「これはキエフやリヴォフではなく、モスクワやニジュニ・ノヴゴロドで語られる言葉だ」[50]。小ルーシ人はすでに文語体を持っているのだから、小ルーシ民族の一部であるルシン人は独自の「ブロークンな」言語ではなく小ルーシ語で記述べし、というのがチェルヌィシェフスキーの主張である。1500 万人の小ルーシ人のうちでルシン人はわずか 300 万人の人種 племя にすぎない。したがってルシン人は「その民族性 народность を保持できない」のだ[51]。とはいえチェルヌィシェフスキーはルシン人の民族性を否定しているのではない。彼はロシア語文語を全ルーシの共通語とする『スローヴォ』の主張の中に文化的なロシア化の危険を見ているのだ。

チェルヌィシェフスキーによる『スローヴォ』批判の第２点は、それがポーランド人に対する敵愾心をあおっている点である。「文語の問題に関するのみでなく」、その「人種 племя の政治生活に関する思想」においても『スローヴォ』は批判の対象だった[52]。「リヴォフの『スローヴォ』はポーランド人よりオーストリア人を好む」、つまり他の小ルーシ人と袂を分かち、ポーランド人とも対立することによって「オーストリア帝国の忠実な擁護者」になっている、

49 ここでチェルヌィシェフスキー批判するのは『スローヴォ』の方針であって、ルシン人の解放運動自体を否定したのではない。これについては、稿を改めて論じる予定である。

50 Там же. ニジュニ・ノヴゴロドを引き合いに出したのは、おそらくここが 1612 年の対ポーランド戦争の英雄クジマ・ミーニンの故郷だからであろう。『スローヴォ』の反ポーランド的な姿勢を強調しようとしたものと思われる。

51 Там же.

52 Там же.

というのだ[53]。

ただしルシン人の民族運動は、独自のルシン語言語を復興しようという文芸復興運動を中心としたものだったことを思い出す必要があろう。ルシン人は彼らの口語と教会スラヴ文字の中にキエフ・ルーシからの言語的伝統が保持されていると考えたから、ルシン語は小ルーシ語の「方言」ではなく独自の言語だと主張してきたし、オーストリア政府によるキリル文字を否定したローマ字表記導入の試みにも強い抵抗を示したのだった。また、ガリツィアにおいてルシン人はポーランド人地主の下で農民階級に固定されていたのだ。当然のことながらルシン人の民族運動は文化的なポーランド化に対する抵抗と同時に、ポーランド人地主に対する階級闘争の様相を帯びた。このような状況におけるルシン人の反ポーランド運動は、民族間の不和を利用して統治しようとするオーストリア政府の民族政策に利することになる、とチェルヌィシェフスキーは危惧したのであった。

チェルヌィシェフスキーの批判の第３点目は、聖職者がルシン人の民族運動を指導している点であった。「正教ルシン人の主教」グリゴリー・ヤヒーモヴィッチと同名聖人、聖グリゴリーの日に『スローヴォ』が創刊されたことを祝う、創刊号第２論文を挙げてチェルヌィシェフスキーはルシン人民族運動と「正教」聖職者との結びつきを非難する[54]。そもそも聖職者は俗事たる民族運動に介入すべきではないのだ。「これは俗世の事柄で、主教の聖職者としての直接的な務めではなく、ときとしてそれと対立する事柄なのだ」[55]。また、聖職者の能力も疑問視される。「あらゆる事柄において指導者となる人は、最もその事柄を成功裏に処理することができ、それをよく知っており、それを自らの思想と努力の主要な課題として立てることができる人だ」[56]。ところがヤヒーモヴィッチは「正教神学は勉強したかもしれないが、法律や政治的戦術は学

53 Там же. С. 777.
54 知ってか知らずか、チェルヌィシェフスキーはグリゴリー・ヤヒーモヴィッチを「正教主教」としているが、彼は合同派である。ロシアとの結びつきを警戒するあまり、チェルヌィシェフスキーがここで彼を「正教」とした可能性もある。
55 *Чернышевский.* Национальная … С. 781.
56 Там же. С. 782.

んでいない」[57]。「ルシン人のすべての俗人は自分たち共通の俗世的利益に自ら関わるべきで」「ルシン人聖職者」をあてにすべきではないのだ[58]。

圧倒的多数を文盲の農民層が占めるルシン人の中で、聖職者がほとんど唯一の知識人階層だった点をチェルヌィシェフスキー知らなかったか、あるいは知っていながらあえて無視したかは不明であるが、世俗文字が禁じられていたガリツィアにおいて文字と言えばローマ字か教会スラヴ語であり、民族語の表記と言えば教会スラヴ語であった。合同派とはいえ、正教の伝統を受け継ぐ聖職者がルシン人の民族運動を指導するのは自然な流れであった。ただしここでもチェルヌィシェフスキーは「正教」聖職者にロシアの影響を見てこれを警戒したのだった。

表面的にはチェルヌィシェフスキーの『スローヴォ』に対する批判は、自らの政治的、文化的無能力をも顧みず、偏狭な民族意識を振りかざしてポーランド人解放運動に対立している点であった。ここから彼は『スローヴォ』を「政治的小児に他ならない」と断罪したのであった[59]。ただ、それと同時に『スローヴォ』の路線の背景に汎スラヴ主義的な大ロシア拡張主義の影響を見、これを危険視していたことも指摘する必要があろう。

すでに述べたようにルシン人の民族運動は、異民族の支配のもとで自己の民族的アイデンティティーをキエフ・ルーシに求め、キエフ・ルーシを介してロシアとのつながりを意識したものだった。ルシン人の民族運動の中から、文化的にはルーシの一部として大ルーシとのつながりを強調し、政治的にはロシアの支援によって異民族の支配から独立しようとする「モスクワ派 москвофильство」が生まれるゆえんである。チェルヌィシェフスキーが批判した『スローヴォ』の路線は、まさにこの「モスクワ派」の路線であった。

他方、「力強いロシアの鷲の翼の庇護下に、自立した精神的、あえて言えば**政治的生活**の贈り物をする歴史的使命、道徳的権利がある」とロシアの使命を

57 Там же.
58 Там же. С, 783.
59 Там же. С. 787-788.

謳うアクサーコフにとって、ルシン人はまさに支援の対象であった。チェルヌィシェフスキーの『現代人』とアクサーコフの新聞『日』はこの論点において真っ向から対立したのだった。創刊間もない『日』の側からは、その第２号でスラヴ学者の В. И. ラマンスキーがこの『民族的戦略不在』を批判し、その批判にアクサーコフが注を付けて補強している[60]。

ラマンスキーの批評に付せられた注釈においてアクサーコフは、ルシン人が「共通のルーシの家族に加わり、それと一体に融合すること」を望んでいるにもかかわらず、ガリツィアでは「ポーランド人の助言で」でロシアの世俗文字および文語の使用が禁じられていることを説明する。オーストリア政府とポーランド人はロシアの影響を警戒しており、これに対してガリツィア人はポーランド人に敵対してロシアに支援を求めているのだ[61]。「ポーランド人はドイツ人に対して自らの民族性を要求しながら同時にガリツィアにおいてルーシの民族性をありとあらゆる手段で迫害し、抑圧している」[62]。その上でアクサーコフは、チェルヌィシェフスキーの評論文がすでにドイツ語とポーランド語に翻訳されてルシン人攻撃に使用されていることを指摘し、この評論が「我々の兄弟のルーシ人たちの驚き、憤慨、失望、あらゆる驚愕」を引き起こしたことを伝えている[63]。

『日』の「批評欄」に掲載されたラマンスキーによるチェルヌィシェフスキー批判は、アクサーコフの注釈より一層、直截で詳細である。冒頭でラマンスキーは「我々の評論家は、読者を煙に巻いているようだ」と切り出し、「虚偽と詐欺がそこでは明白だ」と断言する。ラマンスキーによればチェルヌィシェフスキーは「小ルーシの民族性への共感に関する言葉で装いながら、リヴォフの『スローヴォ』編集部に対する最も厳しく侮辱的な敵対行為」をしているのだ[64]。その証拠として彼が挙げるのはチェルヌィシェフスキーの論文だった。

---

60 *Ламанский В. И.* Национальная бестактность // День. 21 октября 1861. № 2.
61 Там же. С. 14.
62 Там же.
63 Там же. С. 15. Русский は普通に訳せば「ロシア人」である。
64 Там же.

「論文『民族的戦略不在』はオーストリアにおいてドイツ語とポーランド語に翻訳され、印刷されている。そしてそれはルシン人たちの政治的敵対者に大きな満足を与えているのだ」。ドイツ人やポーランド人たちは「この不幸な」ルシン人の民族性に「さらに一撃を与えるための新しい口実にして手段として」このチェルヌィシェフスキーの評論を利用するのだ[65]。

オーストリア帝国内でスラヴ系諸民族の民族性が抑圧されている例としてラマンスキーは 1859 年にガリツィアでロシア語の世俗文字および文語の使用が禁止されたことを挙げ[66]、そのような行為は「その民族性を侵害すること」であり小ルーシを含むすべてのルーシとのつながりを根絶することだと批判した[67]。

そもそもルシン語についても、ラマンスキーはチェルヌィシェフスキーが主張するように、これが小ルーシ語に統合すべきだとは考えなかった。ルシン人が小ルーシに含まれるにしても、小ルーシには文章語がまだ未整備であったし蓄積もなかった。「小ルーシ独自の文学の可能性についての考えは、われわれにとって最大のナンセンスに思われる」[68]。『現代人』はルシン人の状況も民族問題の重要性も理解していない、というのがラマンスキーの立場である。「歴史についても、現下のルシン人の状況についても知らない『現代人』の編集者は、あきらかにルシン人問題の重要性を理解していない」[69]。

ルシン語のあるべき姿についてラマンスキーは、ルシン人がキエフ・ルーシの歴史の中にその民族性を求めるなら、ルーシ全体に共通する言語をもとに民族語を整備するべきだと主張した。ルーシは小ルーシ、大ルーシ、そしてベラルーシの三者が「ルーシの民族」を形成しており[70]、「我々の文語の共通の要素は教会スラヴ語である」[71]。と、このように論じたラマンスキーは、仮に小ル

65 Там же. С. 16.
66 Там же.
67 Там же. С. 18.
68 Там же.
69 Там же. С. 17.
70 Там же.
71 Там же.

ーシ語を整備するにしても、それが完成するまでは共通の学問語としてロシア語文語を「全ルーシ共通語」として使うことを提案したのだった[72]。

ルシン人をロシアの影響から切り離したうえで小ルーシ人の一部として解放しようとするチェルヌィシェフスキーら『現代人』に対して、アクサーコフやラマンスキーの『日』は「力強いロシアの鷹の翼の庇護下」にルシン人をドイツ人とポーランド人から解放しようとしたのであった。

『日』側からの批判に対する『現代人』の反論は、1861 年の第 10 に発表されたチェルヌィシェフスキーの『民族的分別不在 Народная бестолковость』である。チェルヌィシェフスキーの批判はまず、『日』が民族的敵愾心をあおっている点に向けられた。『日』の傾向は「ロシアを愛するすべてのロシア人」の望む「民族的反目の中止」に貢献しない[73]。そもそも国内改革を控えたロシアには、国外問題に干渉する余裕はないのだ。「力強いロシアの鷹は非常にたくさんのロシア国内の問題を抱えている」[74]。

第一、数の上からも「ヨーロッパのトルコ人は 2 百万人に過ぎないのに対してスラヴ人は 7-8 百万」、「オーストリアには 2 千万のスラヴ人に対してドイツ人は 6-7 百万」であり、スラヴ人が圧倒的に多い。彼らはロシアの干渉なしでも自力で解放することができるはずだ[75]。他方、他国領内のスラヴ人を解放しようとするなら、当然、当事国との間の戦争に発展する。「戦争なしでは、いかなる民族も、いかなるくびきからも解放されない」ことは明白である。他方、現下のロシアには新たな戦争を起こす余裕はない。それにもかかわらず『日』は「ロシアがスラヴ人を解放するためにトルコやオーストリアと戦争することを望んでいる」。このように批判しながらチェルヌィシェフスキーは、『日』に対して「なんという小児性だろうか！」と訴えたのだ[76]。

その上でチェルヌィシェフスキーは、スラヴ派が説く「スラヴへの愛」の下

72 Там же. С. 18-19.
73 *Чернышевский Н. Г.* Народная бестолковость // Собрание сочинений. Т. VII. С. 832.
74 Там же. С. 837.
75 Там же. С. 838-839.
76 Там же. С. 837.

に大ロシア主義的な拡張主義を見てこれを暴露したのだった。「スラヴ人種への愛と呼ばれるものの下に全く別の種類の感情と思想がある」「そこで問題なのは彼らへの愛では全くなく、彼らをわれわれに従えようとする利己主義的な打算なのだ」[77]。

結びにかえて

アクサーコフらにとってロシア人はスラヴ民族の中心であった。他のスラヴ系諸民族と異なり、ロシア人だけが唯一、自前の独立した国家を持っていたからである。「スラヴの精神的統一」とスラヴ民族の「兄弟的連合」を掲げる彼らにとって、異民族の支配下で呻吟するスラヴ民族を「力強いロシアの鷲の翼の庇護の下」に解放するのはロシアの「歴史的使命、道徳的権利」であった。

ルシン人の問題は、このような汎スラヴ主義の理念を現実化しようとする際の問題を露呈した。まず、スラヴ民族のルシン人が同じくスラヴ民族のポーランド人によって抑圧されていたこと、つまりスラヴ民族内部での確執が表面化した。しかもポーランド人の解放は「ロシアの鷹の翼」からの分離独立を意味する。のみならずポーランド人はガリツィアを含むポーランド王国を復活させようとしている。ポーランド人対してアクサーコフが「一片のルーシの地も渡さない」[78]と強硬な姿勢を示す理由である。

本稿で対象としたルシン人の民族性を巡る問題は、スラヴ民族であるポーランド人の反ロシア志向、つまり大ロシア拡張主義に対する他のスラヴ民族からの抵抗、およびポーランド人による同じスラヴ民族のルシン人支配、つまり「スラヴの兄弟」内での不和、という二つの矛盾を、初期の汎スラヴ主義思想に突きつけたのであった。

（平成 27 年度札幌大学研究助成制度による研究成果である。）

77 Там же. С, 842.
78 *Аксаков И. С.* Письмо к Н. И. Костмарову от 30 октября 1861 // И. С. Аксаков в его письмах. С-Пб. 1896. Т. 4. С. 264.